

アジア経済研究所図書館には、毎日さまざまな利用者が訪れます。ほぼ全館開架の書架から思わぬ貴重資料の発見があるようで、大量の資料をコピーされている利用者も少なくありません。また、同じ資料でも研究の切り口によって、多様な活用方法があるようです。そこで、この連載では、利用者の方から直接アジア研図書館の利用・活用方法を紹介していただくことにしました。

バングラデシュの新聞から自然災害を読む

溝口常俊

文部省の海外科研で一九八四年に初めてインドに入り、南インドの定期市調査をタミール大学との提携のもと開始しようとした矢先、インディラ・ガンジー首相の暗殺があり、インドでの調査ビザが下りないという事態が発生した。苦慮したあげく、ツーリストビザで入れるバングラデシュに行こうということになった。

以後、ほぼ毎年のようにバングラデシュ通いが始まったが、一九八七年八月、今世紀最大の洪水と報道された最悪の年の最悪の日、八月一九日に現地に入った。首都ダッカからタンガイルの村にバスで向かったが、途中で国道が水没して運行不可となった。そこから村まで船をチャーターし、やつとの思いで到着したものの、民家は流され、住民は避難生活をいられていた。

ダッカにもどり、七、八月の新聞(Bangladesh Observer)に目を通したら、八月中旬から月末まで連日一面のトップ記事に洪水ニュースが載せられていた。中身を検討すると死者数は洪水の ATTACK によるよりも、水が引いた後の消化器系の病気によることがわかった。物価欄を見ると八月中旬から米、塩、チリ(唐辛子)、タマネギなどの食の必需品の値段がいずれも急騰していた。満身に食材を買うこと

ができない貧しい人が、栄養不足の体で、あふれた汚水にふれ、腹を壊し、犠牲になったのである。

翌年バングラデシュの知人から連絡が入った。今年も今世紀最大の洪水です、と。数年後の九四年も大洪水であった。一〇〇年に一回の大洪水が一〇年に一回の割合で発生している。地球温暖化の影響か、あるいは上流部のネパール・インドでの森林伐採が原因なのか、事態はバングラ一国で解決できるような問題ではないことは確かだ。

二〇〇九年から文科省の科研「洪水常襲地における二一世紀型水環境社会の構築」プロジェクトを走らせており、二〇一一年からは名大・東大チームでの「グリーン・ネットワーク・オブ・エクセレンス(GREENE)」事業で、バングラデシュと日本における自然災害記録の収集を担当している。この二つの研究のため、かつて現地で新聞分析したことを思い出し、この際、分析対象時期をバングラデシュ建国(一九七二)以来現在に至るまでの全期間に拡げることを選んだ。決意したのはいいが、四〇年間分の新聞を読むには現地に入って少なくとも一年は滞在しなければならぬ。それを覚悟したが、京

大東南アジア研究所の知人に所蔵の有無を尋ねたら、アジア経済研究所にあるのではないかと紹介された。

そして、アジ研図書館。バングラデシュ建国の翌年から当新聞社が廃社(二〇〇八年)するまでの全新聞が見事に揃っていた。二〇一一年一月から私のアジ研通いが始まった。一〇時の開館に間に合うように名古屋を出て、五時半の開館時まで、マイクロフィルムでの閲覧複写をし続けた。新幹線代もばかにならないので、休憩は昼食時の三〇分と三時のコーヒープレイクの一分と決め、コピーし続けた。初回に受付の方から賛助会員に入るとコピー代が一枚二〇円から一〇円に割り引かれますとお勧めがあったので、即入会。コピーするのは新聞一日約一〇ページの内、トップページ、物価欄のあるページと国内記事ページの三枚に絞ったものの、一日頑張つて八、一〇カ月分が精一杯であった。

とにかくコピーし続けるので、受付の方には迷惑のかけつぱなであった。紙の補充はまだしも、トナーがどんどん減るのでその交換にお手を煩わせた。こんな厄介者に対しても皆さん親切で、複写した大量のコピーを丁寧にパックして大学まで送ってくださっている。

図書館にはバングラデシュの新聞だけではなく多数のA A諸国の新聞、統計書が揃っている。私は図書館員各位とマイクロリーダーを使い倒しはしたが、豊富な所蔵資料に対してはそれらを使い倒すレベルにはとても至っていない。

(みぞぐち つねとし/名古屋大学大学院環境学研
究科科長)